

▼編集後記

今年も予定より遅れはしましたが、『ゲシヒテ』5号を皆様にお届けします。今回は4編の論文と2編の書評を掲載することができました。論文のうちの2編が、それぞれの立場からの研究動向紹介になっています。

本号で取り上げられているのはナチ研究と福祉史研究ですが、それぞれドイツ史の中では重要なテーマであり、多くの人がその研究動向に関心をもっています。しかし、その重要性ゆえに研究の深化も速く、研究が細分化された中では、多少関心をもっているという程度では、量産される新しい研究をとらえきれません。したがって、このような研究動向が本誌に寄せられたことは喜ぶべきことです。

単なる書評でもなく、『史学雑誌』の「回顧と展望」でもない、自分の問題関心に引きつけた研究動向紹介は、先発の全国誌がいくつもある中で、本誌をどのように位置づけるべきなのか模索してきたわれわれに新しい可能性を示すことになったと思います。(羽漫)

今号より編集実務を担当させて頂くことになりました。／さて前号の刊行直前に起こった、「三・一一」と称される一連の出来事から一年を経て、今日、日本の戦後そのものを問い直すことなく未来を考えることは困難となりました。／然し他方で、「国難」という言葉のもと過去の道程を無批判に繰り返そうとする、或いは「グレート・リセット」のような甘言に飛びつくといった、「過去に目を閉ざす」態度が、今尚社会に根強く残り、寧ろ勢いを増さんとしているのも事実です。／ドイツの過去とも相似する、これら今日の社会的、思想的緊張状況に鑑みたととき、私たち歴史を学ぶもの、とりわけドイツ史家に課された任はこれまでも増して重くなってきたるのではないのでしょうか。その意味でも、今号所収の論文で提示された、私たち日本人が「なぜドイツ史を学ぶのか」という問いは、改めて今日性をもつものであると感じております。／この度第5号を数えた本誌が、日本でドイツ史を学ぶ方々の貴重な議論の場として今後末永く機能し続けることに、若輩者ながら、少しでも貢献出来れば幸甚であります。(TS)

▼編集委員

服部 伸 (同志社大学)
高橋秀寿 (立命館大学)
中野智世 (京都産業大学)
近藤潤三 (愛知教育大学)
丸島宏太 (敬和学園大学)
▼編集実務
鈴木健雄 (京都大学・院)

ゲシヒテ

第5号

2012年3月31日発行

▼編集発行

ドイツ現代史研究会 (代表・田野大輔)
〒602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学文学部 服部伸研究室内

▼印刷

株式会社オーエム